

うたとかたりの対人援助学

第31回「奈良県天川村の伝承子守唄を訪ねて」

鵜野 祐介

はじめに ～「おいよ才平は」との出会い～

今年（2024年）11月9日（土）、奈良県天川村を訪れました。目的は、天川村洞川の伝承子守唄「おいよ才平は」の歴史的背景と今日の伝承状況について調べることです。この唄は、牧野英三『日本わらべ歌全集 17 下 奈良のわらべ歌』（柳原書店1983）に収載されています。

1. おいよ ^{さいへい}才平は まだ戻らぬか
まだも戻らぬ ながの旅 ヨイヨ
2. ながの旅すりゃ 身は大切に
人のお世話に ならぬように ヨイヨ
3. 鐘がごと鳴りゃ もう去の去のと
ここは寺町 日が暮れる ヨイヨ

著者の牧野さんはこの唄の歴史的背景を次のように解説しています。「幕末吉野大峯山の領分争いで、吉野山と洞川との間で公訴に進み村の庄屋であった才平が単身江戸に上がりその公事に当った。しかし才平はついに帰らず、その恋女房おいよが才平を恋慕ったさまを、村人が歌い伝えたという」(p.202)。

私が初めてこの唄に出会ったのは1992年、博士論文のテーマを「スコットランドと日本の伝承子守唄の比較研究」に決めて、全都道府県の子守唄を通

観しようと、『日本わらべ歌全集』全28巻を巻数の順に確認していた時のことです。『奈良のわらべ歌』にこの唄を見つけた時、天川村という神秘的な地名、浄瑠璃の心中物のような不穏な気配を持つタイトル、悲劇的な史実が刻まれていると予感させる歌詞、そして「ミーミミ | ミーファー | ミードー | ミーファー | ラーファー | ミーフアミ | ドー」という都節音階のみやびな旋律、これらがいくつも重なり合って、強く印象に残りました。

それ以来ずっと気になっており、2009年刊行の『子守唄の原像』（久山社）には、弔い唄と見なせる子守唄の一つとして次のように紹介しました。「…夫の帰りを待ち続ける妻に対する不憫さと、村のために上京し、おそらくは命を落とした庄屋に対する哀悼の念が、村人たちにこの唄を歌い継がせてきたものと推測される」（鵜野2009：78）。

いつの日か現地を訪ねてみたいと考えていたところ、今年10月、知人から連絡があり、天川村で〈声〉に関する講座が開かれるので参加する予定だとのことでした。そこで、この子守唄について時間があれば調べてみてほしいと頼んでおいたら、天川村総合案内所のガイドの方から情報が聞けたということで、連絡先を知らせてくれました。そして翌月、週末を利用して天川村へ出かけることにしました。



天川村の概要

天川村は紀伊半島の中央部に位置し、村の面積の4分の1が吉野熊野国立公園に指定されています。近畿最高峰の八経ヶ岳をはじめとした名峰連なる大峯山脈おおみねを擁し、源流域のその一滴は溪谷を渡る清冽な清流となって、名瀑をはじめとした美しい自然景観を作り出しています。2004年にはユネスコ世界文化遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」として登録され、天川村はその主要な構成要素としての「大峯奥駈道」・霊場「吉野・大峯」の一部を擁し、およそ1300年前えんのぎょうしゃに役行者によって開かれた修験道発祥の地である霊峰大峯山（山上ヶ岳）には、今も多くの修験者が修行に訪れています（天川村役場公式ガイドより要約）。

子守唄の歴史的背景

前述したように、この子守唄が生まれた背景には、大峯山おおみねさんの登山口である吉野山どろがわと洞川の住民の間の、大峯山の利権をめぐる紛争があるとされています。

洞川出身の農学博士・銭谷宥司さんが雑誌『宇下の洞話』最終号（2011）に掲載した論文「大峯山の利権をめぐる洞川村民の気骨 子守歌『おいよ才兵衛』の背景を探る」は、以下のような考察で締め括られています。

「…江戸中期から幕末まで洞川の状況を概観してきた。長引く吉野山との争いで村の財政が圧迫、大峯山に頼る洞川にとって、利権確保は死活をかけた戦いであり、先人達の苦悩がよみがえってくる。

さて、庄屋であった才兵衛は、何時の頃、どんな訴訟で江戸に出向いたのか、特定する文献を見出すことはできなかったが、…天明二年（1782）に端を発して約20年間続いたと言われる道刈小屋訴訟をはじめ吉野山との一連の紛争が続いた江戸後期の頃と考えてもよいのではないと思われる。

才兵衛は、余裕のない村の財政を考え、洞川の死活を背負って単身で江戸へ出向く決意をしたと思われる。

東海道五十三次の長旅は、一汁一菜の食事、寺社の縁側で野宿など想像し難くない。そして才兵衛は、寺社奉行所へ出向いて洞川の主張を強く訴えたに違いない。……

しかしながら、朗報をもって帰る事ができなかったのか、病魔に倒れたのか、事件に遭遇したのか、才兵衛は再び故郷洞川の土を踏むことはなかった。

一日千秋の思いで才兵衛の帰りを待つ女房の ойよは、我が子を背負って、何時までも何時までも待つのであった。「おいよ 才兵衛はまだもどらぬか 未だももどらぬ ながの旅よ」この歌には、幼児を眠りにつかせる子守歌や恋しい夫の帰りを待つ恋歌としてではなく、洞川のために命を捧げた才兵衛への鎮魂の歌として、また洞川の利権を死守する先人達の闘争の歴史を秘めたふるさとの歌のようにも思われる」（pp.12-13）。

13番まであった「おりよ才兵衛は」

1947年に行われた洞川音楽研究会で紹介された地元古老3名の話でも、「才平」は「才兵衛」となっており、前田家の先祖で、庄屋ではなく村の総代だったそうです。また妻の名は「りよ」と伝えているといい、13番までの歌詞が以下のように記録されています。

1. おりよ 才兵衛は未だもどらぬか
未だももどらぬ 永の旅 ヨイヨ
2. 永の旅すりゃ身を大切に
人のお世話にならぬよに ヨイヨ
3. 鐘がゴーンと鳴りゃあ もういのいのと
此処は寺町いつも鳴る ヨイヨ
4. 人の噂でかえると聞いて
今日も待ちぼうけケデの滝 ヨイヨ
5. 山の鳥さねぐらえ 罫をさがす
又も涙の日が暮れる ヨイヨ
6. 雲が流こみなみれる小南峠
坊やの父さんまだみえぬ ヨイヨ
7. クツ掛け栗橋二ツ岩
聞こえるものは風ばかり ヨイヨ
8. すすりなくよな暮れ六ツの
鐘の音さえも唯涙 ヨイヨ
9. 背なを枕に寝る幼子の
頬に涙が光ってたまる ヨイヨ
10. 待てど暮らせど帰らぬ人は
死出の旅路にならぬよに ヨイヨ

11. 生きているなら夢でもよいから

おりよ無事かと問うてほしい ヨイヨ

12. 村のためだと人はいうけれど

りよの涙を誰が知ろ ヨイヨ

13. 村のためなら^{たた}称えて唄およ

おりよ才兵衛の子守唄 ヨイヨ

(京谷友明氏の資料提供による)。

取材ノートから

11月9日(土)午前8時半、大阪府箕面市の自宅を車で出発しました。前半は高速道路や自動車専用道路を疾走し、後半は曲がりくねった山道をひたすら走って、約2時間かけて午前11時頃に到着しました。この日はちょうど「もみじまつり」を開催しており大勢の観光客で賑わっていました。



最初に、天川村総合案内所を訪ね、ガイドの山崎^{ちさと}さんに話を伺いました。事前に連絡していたこともあって、CDを聞かせていただきました。タイトルは「大峯山麓洞川の子守唄 おいよ才兵衛」、作詞・作曲/不詳、編曲/甲斐いつろうで、3番まででした。山崎さんご自身は、この地で生まれ育ったが、子どもの頃にこの唄を歌ったり聞いたりしたことはあまり記憶していないとのことでした。

次に、山崎さんご紹介で、このCDの作成を手がけた元天川村村長・大西友太郎さん(故人)の娘・文子^{あやこ}さんが女将を務めている「あたらしや旅館」を訪ねました。創業は江戸時代中期の新子屋勘右衛門という老舗旅館です。あいにくこの日は、「もみじまつり」も相俟ってひときわ忙しかった文子さんに、お会いすることはできませんでした。



それから、「天川村立資料館 ギャラリーほのほの」に行ってみました。受付の年配女性にお声掛けすると地元で生まれ育ったとおっしゃったので、この子守唄のことを尋ねてみたところ、三番の「鐘がごと鳴りゃ」はこの資料館の隣にある^{りゅうせんじ}龍泉寺の鐘だろう、おいよ(おりよ)の墓所や才平(才兵衛)の顕彰碑などはない、1946年3月にこの街道一帯が大火に見舞われて、龍泉寺も焼けてしまったこともあって文献資料は残っていない、この子守唄を知っているのは地元の人にもわずかだろう、何とか歌い継がれてほしいのだが、そう話されました。

次に、龍泉寺を訪れました。立派な伽藍を配するお寺の庭園は、紅葉が始まったところで青空に眩しく映えていました。朱塗りの鐘楼に吊るされた鐘は、現在は除夜の鐘にしか撞かないそうですが、鐘銘の「宝永六年(1709年)から、おいよ(おりよ)がこの鐘の音を聞いたものと思いを馳せました。



それから、山崎さんお勧めの「きらく九兵衛味処」で、ニジマスが群をなして泳ぐ清流を窓越しに眺めながら「アユの塩焼き定食」に舌鼓を打った後、洞川温泉センターの大浴場でリフレッシュして帰路に向かいました。



後日取材

山崎さんから、地元の歴史に詳しい京谷友明さんをご紹介いただきました。「天川を学ぶ会」に長年参加しておられた方で、電話で要件をお話すると、後日たくさん関連資料を送って下さいました。前述した銭谷さんの論文、1947年の洞川音楽研究会の記録、『天川村史』抜粋、後述する西館好子さんの『正論』2007年12月号掲載エッセイなど。これらを重ね合わせる中で、この子守唄の原像が立体的にイメージすることができました。

また、「あたらしや旅館」の女将・大西文子さんにも後日お電話で話を聞くことができました。友太郎さんは村長として天川村や洞川の歴史を継承したいと願って、2003年頃に前述のCDを作成したといっています。そして日本子守唄協会の活動をラジオで耳にした彼は、CDを持参して西館理事長の許を訪ねて、次のように訴えたそうです。

「この子守唄は私のふるさとに伝わるもので、村の歴史の中では消すことの出来ない唄なのです。でも、私がいなくなってしまうと、きっと忘れられてしまう。子守唄協会が預かって、消えて無くならないようにして下さいませんか」（西館「にっぽん子守唄紀行～こころの原風景をたずねて 第11回 土地の利権争い・洞川の子守唄」、『正論』2007年12月号）。

おわりに ～「大きな歌」と「小さな歌」～

歌には「大きな歌」と「小さな歌」があります。皆で声高らかに歌い上げ、心をつにすのが「大きな歌」、国歌や軍歌、讃美歌・声明などの宗教歌、それからスポーツ観戦の応援歌もそうでしょう。一方、

そばにいる誰か、目に見えない何かに向けて、あるいは自分自身のためにそっと口ずさむのが「小さな歌」、子守唄はその典型です。

「大きな歌」には国や民族やその英雄たちの「大きな歴史や物語」が刻まれています。これに対して、「小さな歌」には歌い手の生まれ育ったイエやムラやマチの「小さな歴史や物語」が刻まれています。そのため、忘れ去られる可能性も圧倒的に高いのです。数多くの子守唄が生まれ、そして消え去っていく中で、今なお残っているのは奇跡というべきかもしれません。奇跡が起きた理由には、歌自体の歌詞やメロディの持つ魅力ももちろんあるでしょう。けれども、その歌に刻まれた「小さな歴史や物語」を次の世代へと歌い継ごうとした人びとの熱意によることも大きいのではないのでしょうか。「おいよ才平は」はその代表例でしょう。

この子守唄が今もかろうじて伝承されているのは、敗戦直後に活動していた洞川音楽研究会、1960年代から奈良県内全域で民謡調査をして『奈良のわらべ歌』をはじめいくつもの著書でこの子守唄を紹介した牧野英三さん、元村長の大西友太郎さん、大西文子さん、洞川出身の銭谷宥司さん、山崎千里さん、京谷友明さんなどの、地元の方がたの熱意の賜物に他ならないでしょう。改めて、「いのちのバトン」がこの手に渡されたと感じているところです。



（*本稿は、日本子守唄協会『らばい通信』2025年新春号（1月上旬刊行）に掲載予定の拙稿「日本子守唄紀行 第11回『おいよ才平は』（奈良県天川村）」に大幅な加筆修正を施したものです。）